

晩年の住谷天来

——その志を支えた世界をめぐる一試論——

村松 晋

抄 録

本稿は柏木義円（一八六〇～一九三八）同様、上州にあつて終生、非戦・平和を訴え続けた牧師・住谷天来の、特に晩年の思想・信仰の一端に迫ろうとした一試論である。具体的には老いた天来が、戦争へとひた走る状況のもと、「孤独と貧窮」に屈せず、その志を屹立させ得たのは何故なのかを問うた。ここでは天来の志を支えた世界として第一に、「悲痛」をめぐる逆説的な信仰を、第二に天来を支えた友情の交流圏の存在を指摘しておきたい。

キーワード…非戦、平和、日本近代史、キリスト教、自由

「1 問題の所在」

住谷天来（明治二年～昭和十九年。以下、天来と表記）は上州の人で、同志社に学び伊勢崎や甘楽（富岡）を働きの場とした牧師である。昭和二年より個人伝道誌『聖化』を発行、戦争へとひた走る時代への

批判を繰り返し、非戦・平和の論客としても健筆をふるった。しかし大正七年より務めてきた甘楽教会牧師を、昭和九年に病気のため辞任、昭和十四年には国家批判の咎で『聖化』廃刊を余儀なくされるなど、晩年の生活は公私にわたり、必ずしも「明るい」ものとはならなかった。⁽¹⁾

そんな天来を畏敬した友人の長谷川周治⁽²⁾は、天来の遺著となった

『黙庵詩鈔』に「序」を寄せて、老天来の日常を次のように描き出していた。いわく「先生には格別の学歴とはありません。また富なく、友なく、世の称する権力とは少しもなく、且つ聡明なりし最愛の一人子には先だたれ、その生命の如く思慕されし『聖化』誌は余りに真理に忠実なるの故に禁ぜられ、奥様はまた長き病床にあられます。然るに先生は斯かる悲痛の一切を棚にあげて、断々乎として西に東に福音の雄叫びを挙げて居られます⁽³⁾」と。

ここには晩年の天来が傍目にも明らかに「悲痛」の底にあったこと、にもかかわらず志を枉げず、その生を全うしようとしていたことが明らかにされている。折り重なる「悲痛」の中で、年離れた天来がなお雄々しく起ち得たのは何故なのか。本稿はこの問いに向き合った一試論である。

「2」『内村鑑三先生御遺墨帖』に託された世界

初めに考察の前提として、天来がその「悲痛の一切を棚にあげて、断々乎として西に東に福音の雄叫びを挙げて居」たとする長谷川の指摘を検証しておきたい。この点、筆を折られて後の天来の言動として注目されるのは、内村の遺した書を集めた『内村鑑三先生御遺墨帖』（以下、『遺墨帖』と略記）ならびに長谷川が解説を付した『内村鑑三先生御遺墨帖解説（以下、『解説』と略記）』の出版に尽力したことである⁽⁴⁾。

実際、『遺墨帖』表紙の文字と巻末の跋字に関しては、天来が筆を執っており、その熱意は編者である長谷川が同書と『解説』それぞれの序（『解説』では「編者曰ふ」の表記）において、「本書の進行に就ては住谷天来先生が非常なる熱誠を以て、あらゆる方法により御奨励下さいました事を鳴謝いたします⁽⁵⁾」、「本書の成るに就ては住谷天来先生より相変らず数々激励のお言葉をいたゞいて萎えたる魂に大なる活力を賜つた⁽⁶⁾」と顧みるほどに強いものだった。長谷川はまた『黙庵詩鈔』の序も草しているが、そこでも「私は旧臘ふとしたことから不肖の身をも顧みず、内村先生の御遺墨帖編纂を企画いたしました。それに就きまして住谷先生は、一二月の間などは、殆んど毎日のやうにあらゆる方法を以て、筆舌に盡されぬいと御懇切なる奨励の言をあたへて下さいました⁽⁷⁾」と天来への謝意を表していた。

晩年の天来が、かくも『遺墨帖』の出版に尽力したのは何故なのか。その志を問うにあたっては、『遺墨帖』序における長谷川の次の言葉が示唆に富む。

遺墨とは申しながら亡骸^{なきがら}ではありません。語句は簡単であります。が、極めて深遠であります。我等の日用の糧とし、戒めとし、力とし、慰めとするに充ち足れる所の生きてゐるものであります。正義第一、待望、福音を耻ぢず、十字架の道、義聖贖、不飲不欺、禁酒愛国、みな真からの敬天愛人が叫ばれてゐるのです。人は善と知つて何故それをなすことが出来ないのか、魂のうめ

きの解決がその中に教へられてあるのです。先生は有知才能の弟子達の為でなく、多くは無智、暗愚、迷ひ易き者達や、真実なる平信徒の為に書いて下さったものでありました。故に此帖はかかる意味あることにのみ頒つべきものと信じ売物とはいたしません。⁽⁸⁾ (ルビは原文、以下同じ)

ここに表れているように、長谷川は内村の書が「極めて深遠でありながら」「語句は簡単であ」るゆえに、それが「無智、暗愚、迷ひ易き者達や、真実なる平信徒」に届くことを期待して同書を世に問うていた。換言すれば長谷川は、「無智、暗愚、迷ひ易き者達や、真実なる平信徒」が内村の「書」を「日用の糧とし、戒めとし、力とし、慰め」として起つことを祈念していた。傍らで天来も同様の志を漲らせていたことは、『遺墨帖』編纂に臨み、長谷川に送られた次の漢詩に明らかだった。

血種汗耕幾春秋 犠牲須^レ凌^ク古俠風^一
胸中磊塊若^シ蘊^レ魂^一 他日必興^ン内村宗^一⁽⁹⁾

注視すべきは天来が『遺墨帖』の出版により、「他日」「必」ず「内村宗」が「興」ることを念じている点である。長谷川はこの詩を『黙庵詩鈔』の序で紹介し、「他日必ず興らんエクレシヤ即ち真の無教会、と解しました⁽¹⁰⁾」と敷衍しているが、いずれにせよ二人は同書によって、

内村の志を継ぐ群れが「興」ることを期待してやまなかった。

しかしこのことゆえに彼らの意図を、内村に連なる「教派」の形成に見るのは妥当でない。というのも『黙庵詩鈔』における天来の序文が「昭和十六年六月一日 世界大戦の酣なる時記之⁽¹¹⁾」と閉じられ、また長谷川の手になる『解説』の「編者曰ふ」の欄に「世界は今や未曾有の動乱に陥り如何とも收拾すべからざるに至つた。想うて痛歎に堪へない⁽¹²⁾」との一節が見られるように、二人の眼は明らかに、狭義の「キリスト教界」を超え、戦争へとひた走る同時代にこそ向けられていたからである。

然らば天来と長谷川は、内村に呼応して起つ「真実なる平信徒」にいかなる思いを寄せたのか。まず注視したいのは、長谷川が『解説』の「編者曰ふ」末尾において、「世界大戦」の原因をこう説いている点である。いわく「私は世界に散在する基督者と称する者が其責任の一半を負担せねばならぬこと、と思ふ。何故か、それは彼等の大半は口に基督を唱へながら信仰的に無力にして卑怯未練なるが故に、その為すべきことを知り、なさねばならぬ事を感じながら態度を不鮮明にして、神様への義務を怠り平素利己的な実生活をなし居る結果招来せしものと思ふ⁽¹³⁾」と。

ここで長谷川が「世界大戦」勃発の「責任の一半」を「基督者」に求めている事実には注意を促したい。すなわち彼は「世界大戦」の進展如何を「基督者」のあり方にかかっているものと捉えていた。この理解を前提とするならば、長谷川において「真実なる平信徒」が起つこ

とは、眼下の「世界大戦」を押しとどめる試みとして受け止められていたことになろうし、かつ『遺墨帖』の公刊は、そのための第一歩として位置づけられていたと見ることができらるだろう。

関連して、ほかならぬ内村が日露戦争開戦後に提示した、次のような主張も想起したい。

平和を薦めるの時期は未だ当分来たらず、去ればとて戦争を止めることは出来ません、それならば私共平和主義者は今は呆然として手を束ねて居る乎といふに決して爾うではありません。平和主義とは言ふまでもなく戦はないといふこと計りではありません。平和主義は僅かに其消極的一面であります、平和主義の積極的半面は殖産であります、家庭の幸福、山林の栽培、鳥類の保護、河川の利用、土壌の増肥等、其他、総て平民の生涯を幸福ならしめることであります。⁽¹⁴⁾

これらの主張は、「山林」や「土壌」そして「平民の生涯」への目配りが示唆するように、デンマーク等に範をとる平和な農業国への志向、すなわち軍勢力に糊塗された大国主義路線の対極をなす、信仰に基いた小国主義の構想と結びついていた。そして、かような国家を担い得る「平民」の精神的支柱として、内村が併せて問いかけたものこそが、たとえば『後世への最大遺物』であり、『デンマーク国の話』の世界であった。

おそらく天来と長谷川の脳裏には如上の国家の姿があった。すなわち今にも「世界大戦」に加担せんとする祖国を前に、彼らは内村の思い描く小国家の担い手となる「真実なる平信徒」を興すこと、具体的には「家庭の幸福、山林の栽培、鳥類の保護、河川の利用、土壌の増肥等」に尽力する「平信徒」の群れが起つことを祈念した。換言すれば「平民」が「日用の糧とし、戒めとし、力とし、慰め」とし得る「簡単」かつ「深遠」なる言葉を、『遺墨帖』を通じて届けることで、「世界大戦の酣なる時」内村流の平和国家を担い得る「真実なる平信徒」を起たせようとした。

こうした読みは故なことではない。たとえば長谷川は『解説』の中の一文「私の願ひ」を次のように閉じていた。いわく「丁抹国はドイツに占領され居りながら、今度勃発したソ独の戦争に對し、昨日非交戦国の宣言をなし態度を闡明したとラジオは報じてゐる。さすがはデンマークだ、偉い！。想へば今日は先生の御命日である。昭和十六年六月二十八日⁽¹⁵⁾と。ここに表れているように、『遺墨帖』を編んだ当時の長谷川は、デンマークを戦争にかかわらない平和な小国家として、それも明らかに内村との関連で意識していた。加えて天来がその若き日に、内村の『興国史談』——国家を興すのは軍勢力でなく、国民の道義力によると主張——の校正をなし、⁽¹⁶⁾ 国家を国家たらしむ世界を内村に学んでいたことも想起されてよい。これらの事実をふまえると、天来と長谷川における「内村宗」の構想は、内村が説くデンマーク流の小国家建設への試みとして、「酣なる」「世界大戦」への抵抗と念じ

られていたと解釈するのが妥当である⁽¹⁷⁾。この意味で天来は長谷川が描写するとおり、晩年に至ってなお非戦・平和への志を枉げず「悲痛の一切を棚にあげて、断々乎として西に東に福音の雄叫びを挙げて居」たと言つてよい。

〔3〕「鈍機甫」の信仰——「悲痛」を担いつつ

ここにおいて、なぜ天来は「悲痛」に押し潰されることもなく、その若き日と同様に、非戦・平和の志を屹立させ続けることができたのが、あらためて問われなければならないが、初めに注目したいのは、天来が信仰の〈生〉というものを、元来「悲痛」と不可分なものと自負していた点である。この点、たとえば『黙庵詩鈔』にて、天来は自らを「ドンキホーテ（鈍機甫）」になぞらえて次のように述べていた。

鈍機甫ドンキホーテとなると、馬鹿と氣違に「シンニユウ」をかけた程の人物だが、それは外見上の事で、彼の本領は不断の奉仕と真理に対する絶対の信仰である。そして其理想に対して渾身の熱誠を捧げる、彼はあらゆる窮乏に甘んじて愛と正義とを実現する手段となるなら其最も重大視する生命すらも潔よく擲つことを覚悟してをつた。其單純なる心状は途轍もない喜劇をば到る処に演じてをるが、理想その者は聊かも汚されない。彼は但だ世界に人類に敵対する力——魔法使や巨人達——言ひ換れば迫害者と

争闘する為めに生きてゐた。……其精神は実に偉い。「単々たる工夫鈍機甫」と私が讃嘆して措く能はざる処は其処にある。私の一代も要するに此お仲間である⁽¹⁸⁾。

「鈍機甫」の「お仲間」を自称する天来の脳裏には、雑誌『聖化』廃刊の顛末も浮かんでいたと思われる。『聖化』は広告料だけでも月七十円程度をもたらしていただいただけに、発行を「潔よく擲つこと」は、既に牧師も辞任していた老いの身には痛手のはずだった。しかし天来は、その「廃刊之辞」で吐露されているように、国家に屈し言論の矛を収めてまで雑誌を続ける途を選ばなかった。「真理に対する絶対の信仰」と「其理想に対して渾身の熱誠を捧げる」ことに賭けた天来は、雑誌を「潔よく擲つこと」「すなわち少なからぬ収入源を「潔よく擲ち」、「窮乏」に甘んじることを決めたのだった。

とはいえ「鈍機甫」を自任する、その醒めた視線が示唆するように、天来はみずからの境遇を決して「悲観」してはいなかった。むしろ人が「真理に対する絶対の信仰」を生き、「理想に対して渾身の熱誠を捧げる」ならば、「窮乏」や「迫害」、果ては「其最も重大視する生命すらも潔よく擲つこと」を余儀なくされるのは必然と考えていた。換言すれば天来はキリスト者の足取りを、傍目には「鈍機甫」たらざるを得ないものと自負していたと言つてよい。

その逆説的なまなざしは、みずからの意志に反して降りかかる「悲痛」に対しても向けられていた。たとえばこれも長谷川が書いていた

ように、天来は昭和十二年七月、齢七十にならんとして一人息子を喪っていた。天来の深い哀しみは、翌八月の『聖化』に掲げた漢詩「喪^レ子有^レ感^レ」にて、「老泣無^レ声涙沾^レ衣^⑳」そして「父、曰^フ子^㉑汝何^㉒逝^㉓早^㉔」と、抑えきれない「涙」を吐露するなかに明らかった。

しかしここで注視したいのは、「山上八福誰能^㉕兼^㉖ 却^㉗謝^㉘逆境到^㉙古希^㉚」と続けられているように、天来が「幸い」を問いかけるイエスの言葉と向かい合い、以て「日暮祈^㉛神期^㉜完人^㉝」と、人生の完成を祈っている点である。この「転調」は、天来が降りかかった「悲痛」の只中で、神への懷疑や反抗に陥らず、むしろ「逆境」をすすんで負い遂げる途を選んだことを示している。すなわち彼は眼前の「悲痛」を見つめるなかで、それをイエスの「山上八福」を思い知るための試練、かくして「完人」に近づくために不可欠な経験として諾ったのだった。

如上の姿勢は右の漢詩にとどまらず、続く九月の『聖化』でも次のように示されていた。いわく、「人に善を為して其人から悪しく思はれ、又悪しく曰はる、事……斯く為されてこそ我らは始めて基徳（キリスト ※筆者註）の心が解るのである。人に善を為して其人から悪しく思はれ、尚其上に其人から虐待られて、而して心に之を喜び、而して其人を赦し、更に其人の為に善を行んと欲するに至つて我らの品性は稍や完成されたと曰ふことが出来る。忍耐と練達と修業とが此処まで達しなければ到底満足することは出来ない。これぞ我々の幸福観である^㉞」と。

例に出された「人に善を為して其人から悪しく思はれ、尚其上に其人から虐待られ」ること、それが天来のいかなる経験に基くものかはわからない。しかしいずれにせよ天来は、そうした事態に反発・反論することなく、「斯く為されてこそ我らは始めて基徳の心が解るのである」と事態を受け容れて、みずからの「品性」を「完成」に近付けるための一契機と位置づけたのだった。

かくして天来は、陥った「逆境」や強いられた「悲痛」を不如意として抗うのではなく、それを信仰の眼で見えつつ、みずからの身に引き受けて歩もうとした。その志向は老いゆえの無力感や諦めに根ざすものではなかった。遺著『黙庵詩鈔』が「待望の信仰」を問いかけるイザヤ書三十三章からの引用で締めくくられているように、たとえ「外見上」は「窮乏」「悲痛」に終始したとしても、「真理」と「理想」に「熱誠を捧げ」たその人生は、究極的には報われるとの確信に促されてあった。

「4 天来をめぐる友情の磁場」

とはいえ天来が「悲痛の一切を棚にあげて、断々乎として西に東に福音の雄叫びを挙げ」得た要因を、その「個人的信念」にのみ帰することは妥当でない。看取すべきは晩年の天来を支え、その志を鼓舞せしめた具体的な〈場〉の存在である。その不可欠な一角をなした人物として、初めに指を屈すべきは天来の妻・朝江であった。朝江は長ら

く病床にあつたが、一人息子の夭折を経て草された一文「愛着は唯主に」には、「悲痛」をめぐり天来と通じあう世界が次のように示されていた。

可愛い幼な兒を先立たせたり、杖と頼む息子を失つたり、或は再起不可能の失敗など種々深酷な傷手を受けるが人生です。……しかし茲に如何なる事情の許にある人に対しても救主である、神のみ子イエス様が弟子に仰せられた御詞を考へさせられます。「我れよりも父母を慈しむ者は我に協はざる者也、我よりも息子娘を慈しむ者は我に協はざる者也」^{の聖九十一}と……是は甚だ無理な要求をせられる様に思はれます。しかし神の独り子であるイエス様は……真の救主で御座います。だから彼に従ひたい人に対して絶対の愛を要求せられる事は当然の事で、又其要求に応じて第一の愛を献げて、彼に心から従ひゆく時に、無くてはならぬ者はすべて恵まれ、此世で失つた者も来世で再び与えられる希望を恵まれ、日々を感謝で過し、永遠の生命を確実に与へられ天国の祝福を仄ながら味ふことを許されます。……実に主イエス様は奪ふよりは更に大に与へ給ふ御方故、甚しい無理と思はれる要求をなされるのは無限に祝福したい御聖旨と信じます。⁽²⁶⁾

「杖と頼む息子を失つたり」との一語が示唆するように、朝江はこ

こで、明らかに息子との死別を想いつつ筆を執っていた。「深酷な傷手を受け」たのは何より彼女自身であつたろう。しかし朝江も天来同様に、「涙」のうちにどきまることなく、「傷手」をあくまで凝視するなかで、前途の光明を見出そうとした。すなわち朝江は眼前の「悲痛」を「我よりも息子娘を慈しむ者は我に協はざる者也」との言葉に重ねて問うことにより、涙の果てに備えられてある、超越的な「祝福」に眼を啓かれていった。換言すれば、「甚しい無理と思はれる要求をなされるのは無限に祝福したい御聖旨と信じます」とあるように、強いられた「傷手」を、神からの「選び」の証しと受けとめるに至っていた。そのまなざしは、自らもまた「深酷な傷手」を負っていた夫・天来に、慰めと励ましを感じさせたに相違ない。その意味で朝江は、一人息子を失うという「逆境」の只中で、天来の再起を促した第一の「援け手」としてあつた。

志を共にする同信の友たちの支えも大きかった。たとえば個人伝道誌『宗教』誌上にて、たび重なる記事の削除や罰金にも怯まずに、時代批判を繰り返した同志社卒の牧師・二瓶要蔵は、かねてより天来の教会を援け、『聖化』が潰れると「その筋の圧迫によりて廃刊のやむなきに至つた。実に惜しい事である。……その廃刊の辞は中々振つて居る」と天来の奮闘を讃えていた。また天来同様、戦時下、「愛と正義とを実現する」ため職や収入を「潔く擲」たしめられた矢内原忠雄は、『聖化』の廃刊は妥協による続刊よりも、真理の為に大なる証明を為した⁽³¹⁾と連帯の意を示し、昭和十六年五月には天来のもと自ら

足を運んでもいた。⁽³²⁾

かくして長谷川をはじめとする同信の友人が、年老いた天来を物心両面で励ましていたことは、『聖化』廃刊から間もない昭和十四年八月、天来が知人にあててこう述べるなかにも明らかだった。いわく、「御承知の通り重態の病人（後妻朝江）はあり、老体にて一定の収入としてはなく、孤独と貧窮との屯底にあり困り抜いて居りました処が、天は私を（不徳なる私）を恵んで、不測も聖化の廃刊と共に天下の具眼の人々から翕然として同情と哀惜と激励の手紙に添へて沢山の金品を送られ……それが為めに、一脉の血路を開いて、生活費も滞在費も治療代も何の心配なく悠々と閑日月を送り乍ら老さき短き身を安らかに憩はせ居候⁽³³⁾」と。ここに活写されているとおり、天来はその「個人的信念」のみならず、彼をとりまく友情の交流圏に支えられることで、その「孤独と貧窮」を生き抜いたのだった。

地縁を越えて築かれた読者の群れも、牧すべき教会を失った天来の志を鼓舞するものだった。特に埼玉県秩父地方には、昭和に入り天来を慕う若い支持者の群れが起ちあがっており、晩年の天来を問う上で無視し得ない存在感を見せていた。交わりの端緒は『聖化』投稿欄の「常連」、柿原善三・誠一郎兄弟により創られ、天来はこの柿原兄弟の招きによって、昭和八年九月、初めて秩父を訪れていた。この時「三十前後の青年」が「三十余名」も柿原善三邸に集まり、「此青年達の熱心さと篤実さ」に触れた天来は驚きを見せていた。彼らの多くはかねて内村鑑三の著作に親しみ、うち「十二三人」は『内村全集』を「買

求めて」もいた。天来いわく「一見旧の如き親しみを感じた」と。

以後、天来は秩父の青年達との交わりを続け、柿原善三の結婚を司ったほか、兄弟の妹・輝を小諸在住で内村とも親しかった小山英助の息子・源吾と引き合わせ、その縁組に尽力もした。⁽³⁴⁾ 年老いた天来と秩父の若きキリスト者との絆の深さが見られるが、それにしてもなぜ昭和初期の秩父において、天来を慕う人々がかくも現れ出でたのか。

この点、まず指摘したいのは、秩父のキリスト者には、元来、内村および彼に連なる人々の著作や伝道誌を購読した例が多く見受けられたという事実である。大正八年、妻ハルと共に洗礼を受け、東洋宣教会秩父ホーリネス教会の中核会員となった、三十を出たばかりの薬局店主・新井正三はその一人である。⁽³⁵⁾ 当時秩父では、街の主要産業たる銘仙業界の主導権をめぐり、長らく業界に君臨した買継商の大森・柿原両商店と、中小企業に成長し大正六年「秩父正絹革進会」を結成した有力機業家達とが争いを繰り広げていた。⁽³⁶⁾ それは秩父を牽引する業界の刷新を目指すものだけに、関係者間にとどまらず、街全体を揺り動かすものだったと考えられる。

かような気風に連動し、新たな時代に相応しい、新しい生き方への希求を募らせる者が輩出するのは必然だった。新井が上京した折、大手町衛生会講堂での内村の講演に赴いたのは如上の息吹に促されていることだろう。この時新井は「この人の信ずるキリスト教なら、私も信ずることができる」と胸奥を吐露し、帰途、手に入るだけの内村の著書を包み秩父に戻ったという。大正十五年、秩父セメント設立から三

年を経た春には、新井の招きで畔上賢造が秩父を訪ね、朝・夕に講演したが、この時も延べ七〇名が集まった。⁽⁴⁷⁾ 彼らの多くは『聖書之研究』をとおり、寄稿者たる天来の存在とその思想を知悉していたことだろう。

一方、昭和八年、天来の周りに集うた青年らはどうか。それは上記と重なりつつも、その「熱心さと篤実さ」は、大正期の秩父を覆った「革進」機運と対極の、〈不安〉に彩られてもいた。顧みて世界恐慌に連動した昭和恐慌は、秩父にも波及して、昭和四年六月には約三割の織物業者が休業に追い込まれた。さらに昭和六年十一月、業界の実力者・大森商店が、翌七年六月には業界二位の柿原商店が、それぞれ機関銀行の休業共々破産に陥った。⁽⁴⁸⁾

それは当時「五大銘仙産地」の一つであった秩父に深刻な打撃をもたらした。⁽⁴⁹⁾ かような情況下、秩父における「三十前後の青年」が、若き職業人あるいは家庭人として、その生活の場を日本の針路に重ねて憂い、人生への自問に導かれたのは故なしとしない。この点、『聖化』には天来訳のブラウニングやワーズワースの作品ほか、時代人心を問う、戦争へとひた走る祖国を批判する論考が掲載されていただけに、『聖書之研究』無き後の秩父の読者の渇きに対し、強い訴求力を持つたと考えられる。

かくして昭和期の秩父に、『聖化』をひもとき天来を慕う「三十前後の青年」らが輩出した。年老いた天来は彼らと交わるなかで、己を見つめる若者たちの求道的な視線にさらされることになった。その経

験は、暗さを増す世相の中で、次代を担う「真実なる平信徒」の発見として天来に頼もしさを感じさせると共に、肅然たる責任感をも余儀なくさせたと思われる。それはかの内村が「一高不敬事件」直前に、みずからを慕う十数名の学生を想起して、「彼らの前で神を否んではならぬ」⁽⁵⁰⁾との決心に至った構図さながらに、天来をして老いや「窮乏」を言い訳にせず、「悲痛の一切を棚にあげて、断々乎として西に東に福音の雄叫びを挙げ」続けることを強く促したと言つてよい。この促しは、「激励の手紙に添へて沢山の金品を送」った「具眼の人々」をはじめ、長谷川ら支援者への感謝をかみしめるほどに募るものでもあっただろう。この意味でも天来の果敢な言動は、その背後に存在する具体的な〈場〉とかかわらせて把握される必要があると考えられるのである。

「5 おわりに」

以上、本稿では、なぜ老牧師・住谷天来は、「逆境」に幾度も直面させられたにもかかわらず、「悲痛」に圧しひしがれることなく、その最期まで非戦・平和の志を屹立させることができたのかを問うてきた。既に見たように、その基底には、信仰の〈生〉を「悲痛」や「逆境」と不可分な歩みと自任する天来の信仰理解があった。しかし併せて注意すべきは、天来は「個人」として「福音の雄叫びを挙げ」たというよりも、その背後には同信の友からなる群れがあり、彼らに支え

られた天来の「雄叫び」は、同志たちへの誠実な応答としてあったとも考え得る点である。

天来がこの構造をどれほど意識していたかは定かでない。ただ、秩父の若きキリスト者への尽力が示唆するように、同志の群れに授けられていた天来は、みずから友情の交流圏を創り、それを生きる人でもあった。たとえば天来は大正九年以来、当時無牧であった桐生教会に月二度ずつ出張し、夜の説教を受け持ったほか、足利教会にも繰り返し出向いていた。⁽³¹⁾ 逆に天来の甘楽教会へは、佐野教会の牧師で、田中正造とも縁の深い永島与八が応援に訪れ、⁽³²⁾ 『聖化』にも寄稿していたが、⁽³³⁾ 天来も永島の志に応え、永島晩年の著書『鉱毒事件の真相と田中正造翁』には序を送ってもいた。⁽³⁴⁾ 同じ上州で非戦・平和を説き続けた安中教会の牧師・柏木義円のことも応援し、個人で『上毛教界月報』の複数購読を続けたほか、⁽³⁵⁾ 二瓶要蔵の『宗教』にも眼を通し、その果敢な時代批判には積極的に賛意を表していた。⁽³⁶⁾ 天来のこうした〈日常〉の重なりが、その晩年の交誼を招来したことは間違いないであろう。

いずれにせよ、天来を中心とする交わりの存在は、天来の非戦・平和の主張の基盤として、その信仰に勝るとも劣らずに重視さるべきである。それは天来の〈生〉にとどまらず、翻って現代、「生産手段からも共同体からもたんに疎外され、『マス』として原子化された個人はしばしば容易に『国家』によって操作の対象となる」⁽³⁷⁾ とも評される情況下、個人はいかにして〈自由〉を主体的に生き得るかという課題を問う上でも、多大な示唆を与えているように思われるからである。⁽³⁸⁾

註

- (1) 天来における非戦・平和の言論と、「言論抑圧」を受けて後の〈生〉のありようを、その信仰とかわらせて内在的に分析した論考として、拙稿「『言論抑圧』とキリスト者―南原・矢内原が敬愛した牧師・住谷天来をめぐる」(南原繁研究会編『南原繁と戦争―歴史からの教訓』、横浜大気堂、二〇一六年)を参照。なお天来の伝記的な事実に関しては、「年表・住谷天来」(住谷一彦他『住谷天来と住谷悦治―非戦論・平和論』、みやま文庫、平成九年、一八六―一八九頁)によった。
- (2) 長谷川周治に関しては、武藤陽一「長谷川周治(一八八四―一九五六)―平和に生きた前垂れがけの武士」(無教会史研究会編『内村鑑三の系譜 無教会キリスト教信仰を生きた人々』、新地書房、一九八四年)を参照。
- (3) 長谷川『黙庵詩鈔』、序、平和舎、昭和十六年、六頁。本書は天来の遺著であり、長谷川の興した出版社「平和舎」から昭和十六年十月に公刊されている。『遺墨帖』ともども「非売品」とされ、有志に無償で頒布されたようである。内容等に関しては(1)の拙稿のうち「3 〈抵抗〉としての『黙』」を参照。
- (4) 『遺墨帖』と『解説』も長谷川が家業のゴム工場とは別に興した出版社「平和舎」から昭和十六年に公刊された。平和舎ならびに長谷川が出版に賭けた思いに関しては、(2)の武藤論文を参照。
- (5) 長谷川『遺墨帖』、序(頁数の記載なし)。

- (6) 同『解説』、「編者曰ふ」八。
- (7) 同『黙庵詩鈔』、序、八頁。
- (8) 同『遺墨帖』、序。
- (9) 同『黙庵詩鈔』、序、九頁。この詩は天来の作である。
- (10) 同。
- (11) 天来『黙庵詩鈔』序文、三頁。
- (12) 長谷川『解説』、「編者曰ふ」一〇。
- (13) 同。
- (14) 内村鑑三「戦時に於ける非戦主義者の態度」、『聖書之研究』五一号、明治三十七年四月、『内村鑑三全集』第十二巻、岩波書店、一九八一年、一五二頁、一五五頁。なお内村の小国主義について簡潔にまとめたものとして、松沢弘陽「近代日本と内村鑑三」(『日本の名著38 内村鑑三』、中央公論社、昭和四十六年)を参照。
- (15) 長谷川「私の願ひ」、『解説』、二五一頁。
- (16) 内村『興国史談』自序、警醒社書店、明治三十三年、『内村鑑三全集』八巻、岩波書店、一九八〇年、四四三頁。
- (17) なお『遺墨帖』の出版には、内村に長年仕えた藤沢音吉を支援する意味もあったことを付言しておきたい。その事情については(2)武藤論文の指摘(二八一頁)を参照。また当時の藤沢が置かれていた込み入った状況に関しては、政池仁「弱者の友 長谷川周治氏を憶う」(『聖書の日本』二四六号、聖書の日本社、昭和三十一年十二月、一三頁)が、その内情ならびに藤沢を援けた長谷川の秘めたる友情を活写している。
- (18) 天来『黙庵詩鈔』、六〇〜六一頁。
- (19) 手島仁「解説」、前掲『住谷天来と住谷悦治』、一五七頁。本稿は『聖化』掲載の広告について、その依頼主を分析した興味深い論考である。
- (20) 天来「喪_レ子有感」、『聖化』二二八号、昭和十二年八月五日号、復刻版『聖化』下、不二出版、一九九〇年、二八一頁(以下、上・下の別と復刻版頁数のみ)。
- (21) 同。
- (22) 同。
- (23) 同。
- (24) 天来「夏雲秋風」、『聖化』二二九号、昭和十二年九月五日号、下、二八四頁。
- (25) 天来における終末論的祈りを帯びた「待望の信仰」に関しては(1)の拙稿「4 〈待望〉の信仰とその射程」を参照。
- (26) 住谷朝江「愛着は唯主に」、『聖化』二二九号、下・二八七号。
- (27) 二瓶要蔵に関しては、拙稿「二瓶要蔵論序説―新渡戸門下・矢内原忠雄と河井道の『同志』として」(『新渡戸稲造の世界』二五号、一般財団法人新渡戸基金、二〇一六年九月)を参照。
- (28) 二瓶の個人伝道誌『宗教』一〇七号(昭和七年五月)に掲載された公開の日記「我が家の日記」三月二十二日の記載には、「朝早く起きて七時半住谷牧師御夫婦に送られて富岡より帰途につ

いたが、飽くまで親切に優待して下されて実に辱けなし」(同、二八頁)とある。また天来も『聖化』六五号(昭和七年五月五日号)に「基督教の婦人観」と題する二瓶の「講話」筆記を載せ(上・三八七頁)、それが同年三月二十一日に甘楽教会でなされた二瓶の講話であることをことわっている(同)。

- (29) 二瓶「我が家の日記」、『宗教』一九三三、昭和十四年七月、一六頁。

- (30) 「擲職」に至らしめられた矢内原をめぐるとの状況に関しては、拙著『三谷隆正の研究―信仰・国家・歴史』(刀水書房、二〇〇一年、一七三―一七五頁)を参照。

- (31) 矢内原忠雄「聖化」を悼む、「嘉信」二巻七号、昭和十四年七月、『嘉信』、みすず書房、昭和四十二年、三四二頁。

- (32) 『矢内原忠雄全集』二九巻(岩波書店、一九六五年)巻末所載の「年譜」昭和十六年五月の欄に「二二―一四、住谷天来を高崎に訪問」とある。时期的に『黙庵詩鈔』出版に向けての、あるいは『遺墨帖』関連での相談が目的でなかったかと思われるが、手紙で済ませず直接会うことで、老天来を慰め、励ます意味も込められていたのではないだろうか。

- (33) 昭和十四年八月二日 平田吾郎宛書簡(萩原進「住谷天来―いま一人の内村鑑三ともいべき人の生涯」、相葉伸編『近世群馬の人々』、みやま文庫、昭和三十八年、一七〇―一七一頁)。

- (34) 『聖化 解説・総目次・索引』(不二出版、一九九〇年)によると、

『聖化』に柿原善三は十編、誠一郎は十八編、詩歌を中心に投稿している。なお柿原兄弟の生家は、秩父銘仙や上武鉄道(後の秩父鉄道)に重きをなした柿原本家の親戚である。柿原本家は秩父事件の際、「富豪」ゆえ困民党軍に資金提供を迫られたが、このとき困民党軍と対応した柿原小三郎は誠一郎の祖父であった(小山源吾「子息・宥一氏のご教示による」)。父母ともに早世したが、誠一郎は姉の嫁ぎ先に兄・善三共々下宿して中学から青山学院に通学した。しかし卒業前に結核を病み、茅ヶ崎は南湖院にて療養後、秩父に帰郷した。静養中に音楽に親しみ音楽評論を志したが、聴覚を失うという苦難を強いられた。この経験が彼をして中学時代に出会った聖書を主体的にひもとかせたと思われる(小山源吾記「畧歴」、『柿原誠一郎文集』、柿原善三、非売品、昭和十八年)。

兄・善三は昭和二年、誠一郎が十七歳の折に秩父教会で奥国二牧師より受洗しているが(「受洗者名簿」、記念誌編集委員会編『秩父教会のあゆみ 創立八十周年記念によせて』、日本基督教団秩父教会、一九八八年、二〇〇頁)、誠一郎の名は、以後も受洗者名簿にない。思うに結核を病み聴覚をも失った誠一郎は礼拝に出席するよりも、内村鑑三の『聖書之研究』誌をはじめとする伝道誌に慰めを求めたのであろう。天来も耳が不自由であったので、相対した若き誠一郎の苦しみに胸を突かれたはずである。誠一郎の死の翌年、彼を記念して『柿原誠一郎文集』

が編まれたがこの出版は天来の手になるもので、巻末には誠一郎を悼む漢詩が載せられている。兄・善三いわく天来は誠一郎を「愛児の如く最後まで労つ」と（柿原誠一郎文集、柿原善三、非売品、昭和十八年、一七七頁）。

- (35) 天来「東漂西泊」、「聖化」八三号、昭和八年十一月五日号、上・六四号。なお『黙庵詩鈔』にも、「歳晚即興」の詩があり（二〇八―一〇九頁）、「歳晚自武州秩父」帰途、読「黙示録於汽車中」。「有感」との付言がある。天来と秩父のかかわりの深さをうかがわせる。

(36) 同。

(37) 同。

(38) 同。

(39) 同。

(40) 同。

(41) 小山有一氏のご教示による。

- (42) 同。なお小山源吾は当時、父・英助（英助に関しては『ともにこそあわめ 小山英助・みねじ 小山周次・喜代記念集』〔一九七四年、私家版〕を参照）と親交のあった天来らの紹介により、富岡と安中の中間にある小野村の松井十蔵宅で一年間農業実習をしていた（松井家に関しては松井七郎『安中教会初期農村信徒の生活』〔第三書館、一九八一年〕を参照）。松井家の農家の経営は、畑作・養蚕及び乳牛四頭の酪農で、朝四時から

の搾乳・牛乳配達、朝食の後は終日野良仕事の重労働が日課であったが、日曜は休みとなり、源吾は牛乳配達にも行った甘楽教会、また時には柏木義円の安中教会にも出席していたという（小山有一氏のご教示による。片野真佐子「非戦の思想とその継承 柏木義円関係資料（未公刊）の周辺」〔『キリスト教社会問題研究』四五巻、同志社大学、一九九六年十二月、一四七―一五一頁〕にも、当時の小山についての記述がある）。源吾は戦後、松田智雄らとともに、農村・農業の刷新に力を尽くしたことも知られている（戦後の働きについては拙稿「松田智雄の思想―歴史とプロテスタンティズム」〔拙著『近代日本精神史の位相―キリスト教をめぐる思索と経験』、聖学院大学出版会、二〇一四年〕を参照）。

- (43) 「民衆キリスト教」とも称すべきホーリネス教会の信仰とその信徒について、池上良正『近代日本の民衆キリスト教―初期ホーリネスの宗教学的的研究』（東北大学出版会、二〇〇六年）を参照。秩父のキリスト者に内村の著作に親しんだ者が少なくない点に関しては、再臨運動をめぐる、ホーリネス教会の指導者・中田重治と内村に交わりがあったことも大きいと考えられる。

- (44) 新井達太「父からの贈物」、『三軒茶屋 教会通』三九号、日本キリスト教団三軒茶屋教会、二〇一〇年七月、二―三頁。正三ご子息の達太氏には、秩父キリスト教史について、この他にも懇切なるご教示をたまわった。

- (45) 田中均「昭和恐慌下の秩父織物業―工業組合の成立と産地再編成」、『地理学評論』六〇巻四号、日本地理学会、一九八七年四月、二一九頁。
- (46) 前掲新井「父からの贈物」、二頁。
- (47) 畔上賢造「秩父の春を尋ねて」、『聖書之研究』三一〇号、大正十五年五月、『畔上賢造著作集』十巻、畔上賢造著作集刊行会、昭和十六年、四二三頁。
- (48) 前掲田中「昭和恐慌下の秩父織物業」、二二三頁。
- (49) 先行きへの不安とそれゆえの自棄的傾向の表れだろう、金銭がらみの犯罪は昭和初頭から増え続けていた。昭和七年度および同八年度の『埼玉県統計書』（以下、⑦、⑧と略記）によると秩父における同年の窃盗は八一一件で前年比約二倍弱、詐欺・恐喝は前年から一五〇件以上の増加、賭博に至っては五三件で前年比四倍を超えた。秩父の「カフェーバー」も昭和八年には前年より十四軒増えて三十九軒に、「女給」の数は五十七名から九十九名に急増している事実も暗示的である(⑦四八六、五〇四頁。⑧五〇五、五二二頁)。
- (50) 政池仁『内村鑑三伝』、教文館、一九七七年、一八四頁。
- (51) 「教会日誌」、『甘楽教会一〇〇年史』、日本キリスト教団甘楽教会百年史、一九八四年、二三二、二四九頁ほか。「日誌」を読むと、安中教会、沼田教会など県内各地に足を運んでいるのがうかがえる。その精力的な応援ぶりは「座談会 執筆を終えて」の中で、

天来を評し、「かなり広範囲で文芸講演会など出かけておられますね(同、四四三頁)」、「動き方は精力的で、朝は原市、夜は桐生へといった形です。これだけ動いていると、逆に自分の教会でどういう動きができるのかなと、僕は不安に感じた(同、四四五頁)」と顧みられもした。
- (52) 前掲「教会日誌」、二五一頁。
- (53) 前掲「聖化 解説・総目次・索引」によると、永島の寄稿は三編確認できる。
- (54) 永島與八「鉅毒事件の真相と田中正造翁」、独立堂、昭和十三年。序文を寄せたのは天来ほか、安部磯雄、柏木義円、木下尚江などである。なお永島は天来の告別式を執り行いもした(萩原俊彦「住谷天来略歴」、同『近代日本のキリスト者研究』、耕文社、二〇〇〇年、四六四頁)。両者の友情の深さを示す逸話である。
- (55) 大濱徹也「『上毛教界月報』考―購読者と財政をめぐる―」、『木代修一先生喜寿記念論文集1 知識人社会とその周囲』、雄山閣、昭和五十年、二六二頁。
- (56) 二瓶「我が家の日記」(『宗教』一八四号、昭和十三年十月)の九月一日の記載には、「住谷兄より八月号の『我が国将来の宗教』なる文章に対して賛詞あり。感謝なり」(同、二〇頁)とある。ちなみにこの論考ほか八月号掲載の二編により、『宗教』九月号は発売禁止(九月三〇日。同、二三頁)となっている。天来はかくも鋭い時代批判とかような文章を載せた二瓶にエールを

送ったということである。

- (57) 三宅芳夫『近代』から『現代』へ―丸山真男と松下圭一、『岩波講座 近代日本の文化史10 問われる歴史と主体』、岩波書店、二〇〇三年、一一九頁。

- (58) この問題を「誓約集団」ないし「エクレシア・ミリタンス」という言葉に託して問いかけた一人が藤田若雄であったと思われる。藤田とその主張について詳述することはできないが、藤田の教えを生きた一人の職業人が次のように述べている点に注意を促したい。いわく『エクレシア・ミリタンス』という概念が目指したものは、……世俗の働きにおける自己実現に代わって、もつとすばらしい自己実現の道があるよ、と指し示し、かつ、傷ついたものに対しては、慰めを与えるものであったと考えています。しかし、その概念が現実を実現するほどに成功はしなかったと思うし、今後もそのような実態を作ることにはまず不可能だと思います（わたしの体験からは、窮状にあるときに理解と慰めを与えてくれたのは職場の仲間であって、『エクレシア・ミリタンス』の仲間ではなかった。その理由は別途に考察の余地のある問題をはらんでいる）（筒井哲郎「抵抗者の生涯モデル」、阿部健他編著『職業・思想・運動 マイノリティの挑戦』、三一書房、一九九八年、一七頁）と。本稿はこの指摘に触れて、感じ・考えさせられたことを、敷衍しつつ形にしたものと言ってもよい。

Tenrai Sumiya in Later Years: An Essay on the World that Supported his Will

Susumu MURAMATSU

Abstract

Tenrai Sumiya was a pastor who preached anti-war beliefs and pacifism. The purpose of this paper is to clarify the reasons for his persistent stance against war and for peace, despite his difficulties and sorrows. In examining these reasons, the first thing to note is the paradoxical nature of his faith. The second thing to note and explore is the existence of the network that supported him. These two things suggest how liberty and justice may be established and maintained in postmodern times.

Key words: pacifism, peace, modern Japanese history, Christianity, liberty, justice